津高同窓会報

発行所
津市新町
津高等学校
同窓会事務局

盛大に四十年度総会開かる

昭和四十年度津高同窓会総会は去る八月一日、五百名になんなんとする会員、客員を集め、母校を会場として、かってない盛況のうちに開催せられた。

実はこの総会に漕ぎつける迄には、藤田会長、阿部、竹島両副会長、市川学校長をはじめ、関係者の並々ならぬ努力が積みあげられて来た。即ち昨年度の総会が参会者も少く、甚だ淋しい実情にあった所から、同窓会に深い関心をもつ人々の間には、今年の総会こそ津高同窓会の存亡の岐路ではないかという使命感が生れた。そこで藤田会長からは私財を投じても、今年の総会には曽てない盛り上りをもたらそうとの呼びかけが行われ、四月十日に開かれた常任幹事会では、本年度同窓会活動の最大目標として、「八月一日を期して盛大な総会を」との決議となり、早速そのための実行委員会が設けられて、五月から具体的活動に入ったのである。準備の過程において、会場は学校にするか他の便利な所に求めた方がよいか、同窓知名人に講演を依頼するかどうか、会費は徴収するかどうか、等さまざまの問題があったのであるが六月十一日になって漸くそのアウトラインが次のように決定した。

(1)今年度の総会はなるべく多人数の会員に集まって頂くことを本旨とし、固苦しい議事や難しい講演等をさけ楽しい集いにすること。

(2)議事は午前中に終え、お昼の会食、福引、歌の合唱、演奏、映画等の催しを賑やかに行なうこと。

(3)会場は学校とするが、特にPRするため、市内重要個所に立看板を立てる他、五〇〇枚のポスターを随所に掲示する。また、通知状を一、〇〇〇枚印刷し、在校生徒を通じて同窓の家族の方々へ、更に年度幹事を通じて当日出席頂けそうな同期の方々(その人選は各年度幹事に一任)へ夫々送付すること。

(4)会費は一人百円とするが、特に藤田会長よりの寄附金(一〇万円)を参会者全員に均てんするよう取計らうこと。(参会者を三〇〇と見積った場合、参会者は一〇〇円の会費に対して、約四〇〇円の接待を受けることとなる)

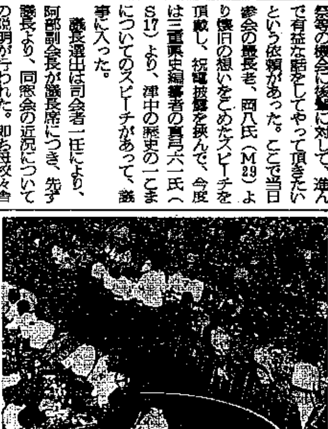
大先輩を先頭に総会風景

以上の諸点について決定の上、七月一日には年度幹事会を開いて、その協力と連絡方をお願いした。いよいよ一ケ月あとに総会を控えて事務局はポスターの印刷、母校の想い出の歌の編集、福引景品の収集者の人選と依嘱、議長、司会、会場の準備、設営等、目の廻るような忙しさ、折から学期末の校務山積の中で、学校長の率先指揮の下、関係職員の努力がつづけられた。更に前々日と前日には夏休中にも拘らず登校した生徒達の手によって清掃や種々の設営作業が行われた。

さていよいよ八月一日、早朝八時半に出校した係職員は、既に校門横の木陰に待機していられる参会者のお姿に目を見張ったのであるが、十時頃ともなると、三々五々つめかけられる方々が、時には受付の前に長蛇の列をつくる有様で、とりわけ初めの頃には日傘をかざした三重桜関係者のお姿が目立ち、定刻が近ずくにつれて、陳川関係の紳士のお姿が増え、また時折どっと集団をなして若い津高の会員が雪崩こむといった有様で十時半には早くも予定数の三百を超え、係は会食や福引の追加に嬉しい悲鳴をあげたことであった。ちなみに定刻までの参会者は、学校側職員を除いて陳川一七〇名、三重桜一〇三名、津高九七名、客員七五名、計三八二名であった。

十一時、第二体育館をゆり動かす拍手の中に開会、まず、藤田会長より、「友あり、遠方より来る、又楽しからずや。」の故語をひいた挨拶あり、つづいて市川学校長より、学校の現況についての報告が行われた。特に本年度の大学入試成績が極めて良好であり、更に運動部も活発で、漸くかっての津中、三重桜の面目をとり戻しつつあること、又先輩の方々は文化会等の機会に後輩に対して、進んで有益な話をしてやって頂きたいという依頼があった。ここで当日参会の最長老、岡八氏(M29)より懐旧の想いをこめたスピーチを頂戴し、祝電披露を挟んで、今度は三重県史編纂者の真弓六一氏(S17)より、津中の歴史の一こまについてのスピーチがあって、議事に入った。

議長選出は司会者一任により、先ず阿部副会長が議長席につき、先ず議長より、同窓会の近況について説明が行われた。即ち母校々舎の復興については全会員の協力により見事にこれを達成、会員名簿、会報の発行も滞りなく行われたこと。しかし半面においては同窓会基金が底をつき、ここ一両年の乗り切りがかなり苦しい現状にあること等について、縷々説明あり、在校生も月々三十円ずつの入会積立てをすることでもあるから、会員諸兄姉の積極的な御拠金をお願いしたい旨の依頼があった。つづいて別項(三面)のように決算報告が行われ、岩崎正博氏(S18)より監査報告あり、全員拍手によって承認。役員改選については、規約により任期二ケ年となっているので、本年は改選の要なしと確認。最後に総会のあり方について、若干の意見交換が行われて、十一時四十分には全議事を終了。つづいて福引抽せんに入った。今年初めての趣好として行われたこの福引は、会員諸氏を中心とする三十五社の御協賛をえて、景品豊富、空くじなし、のサーヴィスが仲々好評を呼び、ひき当てた袋をのぞいて各所に歓声が上るという賑やかさに、係一同労苦を忘れることしばし、十二時十分からは、会場を第一体育館に移して、祝宴に入った。当初三〇〇の予定が一〇〇余も上廻る盛況に、係員一同は机、椅子の搬入にてんてこまい、三百坪の大会場を埋める人波と、ビール壜の林立はまことに壮観であった。



体育館を埋める人波

さて祝宴の司会は県議小田義重氏(S14)にバトンがひきつがれ、先ず藤田会長の挨拶につづき前知事青木理氏(T9)が恩師山下美一先生(M41)を擁して登壇、陳川の想出を語られ、つづいて満場拍手の中に、かっての陳川応援団にその人ありと知られた古川正一氏(S2)が松岡千明氏(S5)と共に音頭をとって、津中校歌の合唱が始まった。なつかしい「伊勢大廟……」の歌声は体育館のすみずみまで轟き渡り、懐旧の情にひたることしばし。つづいて三重桜からは、佐々木かよ氏(T15)緒方千枝子氏(S6)が中心となって、「三重の桜……」の典雅な調べがそれに代り、いよいよ津高の番となるや、汁資良氏(S30)をリーダーとする約五十名の若人が大挙して壇上に押しかけ、「眼を放つ布引……」の鮮かな混声合唱となった。かくて老いも若きも和気あいあいの中に、いみじくもその歌の一節、

「源遠くいで来る
古き流のここにあい
又新しき流なす
我等の歴史かがやけり」

の言葉を胸にかみしめたことであった。歌声がしばし収まって、会食に入る頃から、県警の特別の御好意によるブラスバンドの演奏が会場を流れ、それが好評裡に終ると、今度は竹林昇氏(S7)が前三井銀行頭取高橋竜雄氏(M44)と共にテーブルスピーチ。ここで古川氏再び立ってボート部歌の合唱。通称「ニコチン」こと一見勝太郎先生の朗々たる詩吟等相つぐ拍手の渦の中で、午後一時半、大先輩松田平冨朗氏(M41)の音頭によって万才三唱、ここに祝宴を終った。しかし散会後も尚会場のそこかしこに屯して、気焔をあげるグループあり、校長室、応接室で、賑やかに歓談の花を咲かせる方々あり、又視聴覚教室では、映画を楽しまれる子供ずれの婦人たちもあって、このかってない盛大な総会の昂奮はなおしばし尾をひいたのであった。

(校内幹事・後藤裕文記)

基金について重ねてのお願い

別項(第三面)会計報告にあります通り、本年度繰越金一、二九一、九六四円の内、校舎再建後に入金の寄金と昨年の会報で御願申上げた基金及び名簿売上金は全額定期預金といたしてあります。昨年八月飛会だった総会は別記の如く会長の御芳志と、出席会員の会費及び有志の方々による御寄附や景品のお蔭でした。今後会計前途は甚だ窮屈にて年一回の総会や、会報の発行等は全く在校生徒から徴収する一人月額三〇円の会費に依存する実情であり、その入金も四十一年度を頂点として漸時減少せざるを得ないものと思われます。この際、私共の同窓会発展のために年々会員有志の方々から御芳志をお寄せいただくことが出来ますれば運営の前途も明るくなります。去る二月三日常任幹事会で、全会員に会報を以って再度御願申すようにとの話で御座いましたので右実情御賢察下さいまして、同封の振替用紙にて出来る限りの多数の会員の皆様からの拠金をいただけますよう紙上を借りて重ねて御願申上げます。

(但し振替で御送金の方々には振替払込票をもって領収証にかえさせて頂きます)

御挨拶

同窓会長　藤田　広

いろいろの足跡を残して、昭和四十年は去り、新らしい四十一年となりました。昨年の総会は陳川、三重桜、津高の三者大同合併以来の盛会で、その出席数約五百名、老若男女の別なく一同学生の昔にかえって、愉快なる一日を過したのでありました本年はより以上盛大である事を願います。また一面単位別では明治会、陳三会(大正三年卒)大五会昭和会、津高同窓会、三重桜等別々に相会して旧交を温めています地区的にも東京支部、大阪支部が毎年盛々しく会合をしています。

顧みまするに社会では人間本然の純真さが影をひそめて暗い話題恥ずべき報道、恐ろしい行為等充満して、心ある人々をして痛憤せしめて居ります。かゝる世相にあって学生生活の追憶に宿る純情こそ人間の尊さであり、家庭を明るくし、社会を清浄化する基礎であります。

そしてそのための途は同窓会による事であります。即ち会員が相会し、相交わり、若き日の追憶にふけり、若さと純情を呼びもどすのであります。近来本会員諸君が会報及び会合をもってその機会を多く得て、お互の純情をよみがえらせて居る事は時宜を得たもので御同慶に堪えません。

殊に去る三十七年の罹災以来愈々一致団結本会の目的達成に邁進しつゝある事は誠に結構であります。第二期工事も間近にせまって来ていますから一日も早く復興の完成する様格別の御協力を会員諸君にお願いするものであります。

PTA会長　倉田文治

「津高の生徒は最近よくガンバルね、昨年大学への進学成績は県下で一位、しかも二位の四日市高三位の伊勢高の合計数を超えましたね」これは教育関係者のことば「最近高校生の非行には手を焼きますが、津高の生徒は一名もありませんよ」これは防犯関係者のことば。「折角の採用試験の面接のとき、ドアーのノックを忘れたり、服装にしまりがありませんね」これは職業人のことば。「集団行動がバラバラで殊に冬のオーバーなど十人十色、これがエリート意識というのでしょうか」これは巷の声。「色々イデオロギー的な騒ぎが起ると、よく通学路にはビラ、ポスターがはられていますが、あれが純真な高校生のどこを狙っているかを見破る丈の知性と教養を十分身につけてやり度いね」これは父兄のことば。同窓、先輩、社会、巷、父兄、これ皆津高の明日を思い憂えて下さる励ましと愛情に外なりません。何と恵まれた幸福な環境でしょう。三十八年大火のあと先輩の方々によって僅か数カ月の間に四千万円に上る浄財が集められ、然も一年以内に立派な校舎が完成しました事は永く永く校史に残りましょう。これに応える道は、もしもはきちがえた自由の弊があれば、一日も早くこれを取り除いて堅実な校風を育て上げる事です。

古い中国の言葉に一年の計は苗を育てるにあり、十年の計は木を植えるにあり、百年の計は人を作るにありと。まことに教育は民族の苗木を作るところであり、私共はお互に心を合わせてよい芽を育て、よくない芽は摘み取り、よい枝を十分に伸ばしてよい花を咲かせ、よい果実を得ようではありませんか。

校史編纂と第二期工事

学校長　市川一郎

今年一月五日から朝日新聞に「母校人物山脈」が連載され、そのトップを津高が飾ったのですが、その連載企画の序曲として元旦の朝日の紙面に「はばたく若き群像」という見出しで、本校二年生数十名が新館を前にして群がっている写真が大きく掲載されました男女の一人一人が眸を輝かし如何にも聡明そうであり、元気に満ちあふれた顔、顔、顔でありました今年の生徒総数は二一七二名、来年度から生徒数の漸減期に入りますので、この数字は空前絶後の記録となる筈ですが、皆あの写真のように元気に学校生活を送っています。

大部分は進学希望者であり、入学難は今後一入きびしくなるので生徒の生活もそれをよく反映して緊張している姿は、たのもしくもあり、また可愛想でもあります。人間形成の点から又真の知育、体育の点から考えて、今日の高校教育は正常ではない。その病源は大学入試の制度方法にあると考え、その改善を叫び乍らも、現実の問題としては連絡船にのる時のように、人が走れば我も走るという姿をとらざるを得ない。この三月も、去年の三月と同様に、それ以上によい進学成績を収めて、名実共に天下の津高になりたいものと考えています。

学校も津中のスタートから数えて今年は満八十六年、県立津高女の誕生から数えて六十五年、新制高校になってからでも十八年経ちます。二度の火災と疎開、移転などで学校の記録も散逸して了っていますので、今の時期に学校の沿革史を纏えておくべきだと思い、その計画をすゝめています。三重県史編さんの仕事を担当された真弓六一氏がその仕事の中で本校に関する古い資料を多数発見されたことも動機一つになっています。完結の暁には同窓会の仕事として刊行していただき、同窓各位にも頒ち、温故知新に資したいと思っています。この編さんについては同窓会側からも委員として計画に御参加いただきたいと考えています。陳川、三重桜、津高について写真、会報、会誌その他御気づきの資料が御手許にありましたら何卒積極的に提出していただきたく学校へ御連絡いただけたら幸いであります。

もう一つ仕上げたい仕事が校舎の第二期工事であります。理科棟と新校舎二棟の道路に面した外観は正に超高校級で、皆様の母校と誇っていただくに相応しい落ちついた偉容を具えていますが、その奥にある木造西棟は前者との対照上誠にみすぼらしい陋屋であります。そこで復興工事時の構想通り、この西棟を解体して鉄筋二階一棟延約四二〇〇平方米のものを新築する計画で、普通教室一七の他に美術、音楽、書道、家庭科等の特別教室、茶華道研修室等の整備をその内容とするものであり、一億二三千万円に及ぶ工事で、これで校舎整備は一応完了する計画であります。同窓会・PTAの代表十数名の方々が知事陳情をして下さったり、同窓の倉田、小田、長井の三県議や地元県議の方々が引続き御努力いただき、遂に四十一年度から継続事業として着工という知事査定に漕ぎつけました。何れ県議会を経て施工される見込であると、同窓各位に御報告できることをよろこんで居ります。

学校、同窓会、同窓会と学校との関係、それらを含めて学校は概ね好調に運んでいるようです。会員お一人お一人の御健勝と御発展を御祈りします。

新管理棟（左）と改築される旧校舎

母校の歴史（1）

―明治期の津中学と津高女―

真弓六一（昭十七津中卒）

まえがき

津中学校が、明治十一年九月公布の太政官教育令により十三年一月二十五日創立、三重県立高等女学校が、三十二年二月の高等女学校令で、三十四年四月二十五日に開校してから、それぞれ八十七年、六十六年になります。

かように古い歴史をもつ高等学校は、全国的にもきわめて少なくその伝統を誇るのでありますが、かって校史が上梓されたことがありません。ただ、昭和十年十月刑部の地に校舎が新築成った際、真弓清右衛門先生が、年表式の「三重県立津中学校沿革」を編集されたことがあるのみです。これは年史ではありませんが、詳細な記述で、教務日誌がない今日、貴重な文献であります。

市川一郎校長は、かねてより校史編さんを企画中でありましたが学園が新装された昨年、その編修に踏み切られました。先年県庁で「三重県史」が編さんされた際、私は編集の余暇に中学校の資料も若干集めました。またこれに対し古い先輩が協力を惜しまれなかったので、今後の深いつながりに恵まれました。出身校であることも理由の一つとなり、市川校長は、校史編さんに協力することを求められたのであります。

二十三年四月新学制により津中学と津高女が統合、津高等学校誕生以後は、米本宏先生が準備委員長となり、校内の先生方で分担執筆され、津中学に関する部分は、一応私が受持つことで発足したのであります。

周知のごとく、明治五年壬申七月、太政官より「学制」が公布、「邑（むら）に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」仰被出書の趣旨に基き、近代教育が創始されますが、初等教育につづく中等教育の基本計画も、明治新政府により着々と確立されました。

中央の教育方針が三重県の中等教育を規制して、県内の各中等学校、とくに津中学、津高女に如何に現われたか。校史は一中学校、一女学校の歴史を辿りながらも、わが国中等教育の流れを把握せねばなりません。すなわち津中学、津高女の歩みから、日本の中等教育の展開過程の具体的様相に触れる必要があります。

これが執筆の第一の立場であります。

さきにも述べたごとく、津中学の開校は明治十三年一月二十五日であります。十九年四月十日勅令第十五号の中学校令により、政府は、わが国中等教育の基幹をなす中学校を制度的に確立させるのでありますが、津中学の創設は、その以前にだされた十七年一月二十六日文部省達第二号の、中学校通則よりも更にさかのぼるのであります。

また津高女は、三十二年二月八日勅令第三十一号の高等女学校令が、その設立基準となって創立されました。明治五年二月開校の東京女学校、十五年七月の東京女子師範学校付属高等女学校には遠く及ばずとも、県内において最も古い歴史があります。

かかる長い道程のなかには、学園内に種々の事象が生起しました。それは津中学、津高女独自の教育方針として現われたこともあれば、三重県、なかんずく津市の風土と密着した個性として現われたこともあります。かように唯一回的な事象を看過することもできません。

ここに第二の方向が求められます。

かくのごとき二本の主柱――三重県中等教育のなかに占める両校の姿と、二校の果した独自の意義――が、執筆方針となりますが、この背後にある態度は、科学的精神に貫かれた実証に拠らねばなりません。

さて、以上を進行させる現状は加何を述べますと、資料はほとんど残存せずであり、難航を予想されています。昭和二十年七月二十八日の空襲で重要資料がほとんど焼失、また三十七年十二月二日の火災で、残る資料が皆無となりました。従って教師の担当教科とか、使用教科書、生徒数の異動といった、基本資料、統計の類さえ不明であります。

また往年の「伊勢新聞」は、津中学の種々の事件を詳しく報導したのでありますが、完全には整っておりません。幸い県庁の所蔵する公文書、資料は、県会の議事録、県公報などが保管されているため、予算的資料、規則などは収集可能です。

さて、明治期卒業の先輩を順次歴訪し、往年の回想を記録することに重点をおき、校友会誌、卒業写真、通信簿、教科書などの所蔵品収集を並行させておりますが、明治三十年代卒業者が、多数生存とは申されず難渋であります。二十八年修了の藤林保氏が東京に矍鑠、津では、二十九年卒業の岡八氏が健在ではありますが、かような例は稀であります。しかし、土曜、日曜の余暇を利し、県内外の先輩訪問を急いだ結果、その全容は把握できなくとも、かって知られざる事実が徐々に明確になってまいりました。

たまたま伊勢新聞の三井泉秀社長（大十二卒）がこの窮状を察せられ、校史を連載して不明個所を訴えては如何、と勧言、市川校長の快諾を得て、一月四日付から毎月隔日執筆を初めております。

春秋孔羊伝に「三世」という言葉があります。己と父の世代は見ることのできる時代であり、祖父の世代は聴く時代である。曽祖、高祖になり伝聞の世界になる、との意味ですが、私にとり明治十二年岩村県令の、県会諮問にはじまる津中学の草創期からして、すべて伝聞の時代であります。諸先輩の誘掖を請わねばならぬ所以がここにあります。

本号は通史的叙述を避け、五項目の解説をする形式によりました。なおこの内容は諸先輩の御高示によったものでありますが、一々の芳名は略させていただきました。深謝申上げる次第です。

掲載写真の複写は、堀川愿二氏（昭・十六卒）、の担当であります。

創立

明治十二年四月三十日、津市寺町、願王寺で開かれた第一回通常県会に、県令（知事）岩村定高は中学校設立議案を諮問した。すなわち、明治十二年度中地方税をもって支弁すべき経費予算として、総額三十四万七千二百三十円のうち、県立学校費一万二千八百九十七円五銭を原案として提出した。県会は、これを八千七百七十二円五銭に削減したが可決、ここに師範学校と中学校が設立されることになった。さてその予算内容はつぎのとおりであった。

二千三百二十一円八十三銭	中学校費
内訳	
八百四円	俸給
百三十七円二十二銭	給与
三十六円	旅費
一千三百四十四円六十一銭	校費

同年十一月に創立事務所を仮設、委員を福井一等属、床井六等属、椿蓁一郎師範学校長として、校員、酒井良明とともに校則を編成、十二月一日これを管内に公告した。

教則の課程は上等、下等おのおの二年の修業年限で、合わせて八級であった、毎級の修業年限は六カ月、通算四カ年で卒業するものである。学科目は、修身、地理・歴史・物理・化学・博物・生理・経済・英語・数学・簿記・画学・文章・翻訳・体操の十六科目と定めた。

校名は津中学校と称し、職員は校長、教諭、監事、雑務係とし、初代校長には福井県士族、酒井良明が校長兼教諭として任ぜられた監事は師範学校監事の三重県士族田辺衲夫が兼務するものとし、教諭には、明治十二年七月東京師範学校、中学師範学科の第一回卒業生である、鳥根県士族、小原安治が任命された。また雑務係は、三重県士族、矢納七郎右衛門、中山右馬男であった。

校舎は、安濃郡津、丸之内旧津藩校、有造館の建物を、土地とともに内務省より下賜されてここに開設した。中学校開設までは、三重県庁の庁舎として使用されていた。またここには赤塗りの旧式門――有造館の入徳門――が残存して北向に構えられていたので、世間は中学校を「赤門学校」と呼んだ。

さて十四歳以上二十五歳以下の生徒を募集して、翌十三年一月二十五日、岩村県令出席のもとに開校式を挙げた。こののち、この日が創立記念日となったのである。

当時は小学校も上、下二等に分れており、下等小学校は、六歳より九歳まで、上等小学校は十歳より十三歳までの在学八カ年が修業年限で、したがって下等中学は十四歳から十六歳、上等中学は十七歳から十九歳までに卒業させるのを原則としていた。

入学試験には四十名ほど応募したと伝えられるが、十三年五月三十一日調べ生徒名簿には、三重県津中学校生徒、第八級、三重県士族、服部金男、十七年五カ月以下二十八名とあり、これが入学許可者と考えられる。ところで開校早早のことで寄宿舎の設備もなく、仮寄宿舎に師範学校寄宿舎一室を借用、郡部から入学の通学困難出身者を収容した。

学科課程はどのように定められていたか。

第八級　第一年前半期
○英語学、綴字書、第一読本、第二読本、○史学、西村茂樹編纂万国史略、皇朝史略、○文学日本文法講授、作文、○数学、高等算術、○簿記、単記

第七級　第一年後半期
○英語学　ピネオ氏英文典　習字　○地学　コルネル氏英文地理書　○史学　万国史略　続々皇朝史略　○文学　日本文法講授、作文　○数学　高等算術　○簿記　単記　○画学　臨画　幾何画法

第六級　第二年前半期
○史学　パーレー氏英文万国史　日本外史　○理学　宇田川準一訳改正物理全誌自一至五　○生理学　カッツトル氏英文生理書　○文学　論事矩　作文　○数学　代数　○簿記　複記　○画学　透視画法　投影画法

第五級　第二年後半期
○史学　パーレー氏英文万国史　日本外史　○理学　宇田川準一訳改正物理全誌自六至終　○文学　論事矩　作文　○数学　代数　○画学　写生　製図　○簿記　複記

第四級　第三年前半期
○地学　モーレー氏英文天然地学　○史学　十八史略　○理学　クエッケンボス氏英文窮理書　○化学　開成校板ロスコー氏化学書自一至三　○文学　正編文章規範　作文　○数学　幾何

第三級　第三年後半期
○文学　十八史略　○博物学　勧業寮板斯氏農学問答　○経済学　ハウセット氏小英文経済書　○化学　開成校板ロスコー氏化学書自四至終　○文学　正編文章規範　作文　○数学　幾何

第二級　第四年前半期
○史学　チャンブル氏英書近世史　元明史略　清史攬要　○博物学　藤井徹著果木栽培法　動物学　○化学　ボーマン氏実地化学　○文学　続編文章規範　作文　○数学　三角法　○翻訳　和文英訳　英文和訳

第一級　第四年後半期
○史学　綱鑑易知録　温史の類　独見　○修身学　ウエキランド氏大英文修身論　○法律学　開成校板泰西法論　○数学　三角法　○翻訳　和文英訳　英文和訳

以上の学科課程が定められ、一月二十六日より授業を開始した。当時の時間割はどんなものであったか。

明治十三年一月二十七日課業時間割
皇朝史略（自午前九時至十時）
同　　（自午前十時至十一時）
甲乙算術（自午前十一時至十二時）
英学（自午後一時至二時半）
洋習字（自午後二時半至三時）

右のような掲示が古ぼけた校舎の一隅に掲げられ、その前に弊衣破帽の青年らが集まっているという光景を思い浮べるならば、発足間もない津中学が偲ばれ、今昔の感に打たれるのである。

四州学館

明治十八年五月に第二代校長、伊藤新六郎が職をしりぞくと、同年十一月津田純一が校長に任ぜられた。津田校長は、同時に三重県師範学校長も兼任した。津田は大分県人で、つとに慶応義塾に学んで福沢諭吉の薫陶を受け、同塾卒業ご、米国ユタ州のカナーバ大学に留学、バチエラー・オブ・ローの学位を得て帰朝、外務省に勤めた。津中学に赴任してからは教育方針に進歩性を採り入れ、一生面を開いた。すなわち十九年六月、米国コネチカット州出身のイー・ジー・ストラーを、外人教師として始めて招聘、つづいて二十一年九月、カナダ人ウエスレー・ビックを英語教師に任用するなど、きわめて積極的であった。

由来津中学は県庁、県会から睨まれており、中学はあたかも謀反人を養成する学校のごとく見られていた。かような状勢は何れ大騒動はまぬがれないものと、誰しも予想するところであった。その現われが明治十四年に津中学校廃止決議案として、県会の議事にのぼったのと、同十五年十一月全国の新聞紙上に掲載された山本栄吉事件であった。険悪な空気が急に改まるわけでなく、県庁学務課は絶えず監視の目を注いでいた。ついに二十年三月、中学校専任校長となった津田と県当局の間に、教育方針について意見の相違をきたした。津田は二十二年一月決然として職を辞し、かねてから計画していた構想を実地に移すべく、同志を率いて津市寺町、上宮寺内に「四州学館」を設立した。時に津田校長四十歳であった。因みに四州とは、伊勢、志摩、伊賀、牟婁の謂である。これに従う者は某教師一名を残し全員連袂辞職、生徒もほとんどこれに赴いた。県下の有力者もこれに賛同する者多く、中学校の存廃まで議せられるにいたった。

かって十五年十一月、山本事件により酒井良明校長始め英学派教員、市川勝太郎、岩越重暢らは、その責任を負い辞職、その際、君死すれば臣之に殉ずるの古訓に従い、全校生一人残らず退学、事実上一時閉校の止むなきに至ったことがある。四州学館の際もこれと軌を一にし、津田に殉死するのである。この騒動の隊長が、後年千代田生命保険会社の重鎮として財界に覇を唱えた、堀井卯之助であった。彼は衆生徒に推されて隊長となり、津田校長を助けて私立学校を開校させたのである。

かかる事件に接した県当局は、画策のうえ事態を漸くおさめたが、この事件に処したのが、二十一年四月第三高等中学校教諭から、三重県尋常中学校長に嘱託された清水誠吾その人であった。しかし、四州学館は閉校したものの、種々の理由から私塾として成功せず、津田も津を去って大阪に移り、後年朝日新聞に合併する「大阪公論」の編集員として活躍した。ただ惜しむべきは、陳川同窓会名簿に、明治二十一年三月卒業生が僅かに八名であるのは、かかる理由によるのであり、堀井始め幾多有為の人材が再び帰校しなかったからである。

このことは十五年十一月の山本事件にも同じであり、桑名郡長島の出身で陸軍中将となり、後年桑名町長でもあった楢原銭太郎、その次弟で文部次官となり、帝国美術院長、学習院長を歴任の楢原鎮次郎をはじめ、数多くの逸材が名簿から脱落している。ともあれ後年昭和八年五月、京都大学に教学の嵐が巻き起るが、これに遡る四十五年前、教育方針の相違から、かかる事件が惹起したのは注目に値する。

中学校廃止問題

明治二十三年十一月一日開会の通常県会に、二十四年度地方税支出予算が審議され、教育費として尋常中学校費八千七百九十五円七十六銭一厘が提出された。県会は、これを八千七百四円七十六銭一厘に削減し決議したが、重要決議として「尋常中学校ノ件ニ付建議」がなされた。

尋常中学校ノ経費ハ永遠之ヲ地方税ニ求ムルハ其当ヲ得タルモノニ非ス故ニ左ノ条項ヲ知事閣下ニ建議ス

一、県立尋常中学校ハ明治廿五年度以後地方税支出以外ニ独立セシメ度事

但其処分方法ハ理事者ニ於テ適宜ノ計画ヲ立テ来年度ノ県会ニ諮問セラレ度事

すなわち中学校存廃の重要決議である。ではここに至る討議は如何であったか。

まず廃止論の主張は、中学校定員は三百名であるが、現在一百四、五十名しかいないのは、この教育が民度に適しないからである。県民から徴収の地方税で、一部富裕の子弟の教養費支弁は不可である。二十一年県会以来、中学校廃止論起り、毎年議論されているが、生徒に悪影響があるから、廃止が当然である。処理方法としては、地方税より三千円の補助を出し、授業料を増額すれば経営し得る、というものであった。

これに対し維持論は、中学校設立以来生徒数毎年増加している。地方税で土木費、警察費を支弁する如く、教育費支弁も当然である。全国四十余府県何れも、府県立中学校がある。将来県下の福利を増す人材養成として、中学は存続させねばならない。明野勧農場財産を売却して中学校資金とする方法、或は三千円の補助税も、地方税支弁と同じである。姑息な手段に訴えてはならない。

そこで折衷説があり、二十四年度限り地方税支弁とし、この一年間に地方税以外に独立させる計画をし、そののち廃止する。調査委員で案を作るがよろしいというのであった。

採決の結果は二十三名対二十六名で、維持論の主張が辛うじて通った。しかし如何なる名案が案として県会に提出されるかきわめて注目されるに至った。

さて問題の第十四回通常県会は二十四年十一月二日、成川尚義知事の式辞で開会した。明治二十五年度地方税支出予算案、総計四十二万九千五百三十八円五十一銭二厘が提出されたが、教育費二万六千七十六円三十銭七厘のうちに、尋常中学校費八千五百六十八円三十三銭九厘が含まれていた。

そこで県会は原案総額に対し、二万二千百余円の大削減を加えた。その削減中に尋常中学校費があったから俄然大問題となった。

加何なる案が諮問されるかと、県議員の期待にもかかわらず、また何等の交渉諮問もなく、依然として中学校費を地方税支弁の教育費中に計上したことが、県会の感情を害したものか、八千五百余円を削除、当局の反省たらしめたのである。

事ここに至って成川知事も釈明、また議員も、冷静になると、再び討論の必要を唱える者も現われてきた。激論のすえ採決に移ったが廃止論者二十四、原案賛成者二十三で、何れも過半数に達しなかった。そのため議案は消滅する結果となった。そこで修正案が提出されずと認められ否決となり、修正案を議に付したが再び消滅、修正に入らず

県会としては中学校費を必要として削除したのではなく、前会て建議の精神を貫ぬき当局の反省を促がしたものであるから、妥協の余地が十分あった。従って、直ちに臨時会の再議に付されて修正

和周会雑誌　明治33年11月発行の「和周会雑誌（第11号）」であるが、これが校友会誌のもっとも古いものと考えられる。中央の写は秋山正義校長の写真が巻頭にあり、右の写は「端艇伊勢湾周航記」が掲載されている。（和波豊一氏、明35卒、所蔵）

可決、ここに三年間続いた決議がくつがえり、中学校経費は復活、津中学存亡の一大危機はまぬがれることになった。

さて、この危機に臨んで忘れることのできないのは、「三重同学会」—在京三重県出身の博士、学士ならびに帝国大学生、第一高等中学校生徒で組織—」の活躍である。予算案否決の情報が同学会に入ると、これは三重県中等教育を破壊する暴挙で、同学会は座視すべからざる事件とし、学士は磯谷幸次郎と中村清彦、学生は川地啓三郎と佐々木清麿の四人が発起人となり、二十四年十二月五日緊急総会を開いた。宮崎道三郎、藤田四郎、高橋綱之助、大井才太郎、石川直記、学生側で、梶原鎮次郎、伊東祐忠、中西用徳、藤島範平、木村雄次らが参加、総数二十一名の会員出席、万場一致廃止すべからずの建議書を、知事、成川尚義、議長、木村猶太郎、副議長、福地次郎に送ることになった。建議書は、十二月七日前記三氏に送るとともに、沈滞の三重県輿論を喚起するため、伊勢新聞、三重新聞にも送られた。

これに対し成川知事からは、小官も非常に憂慮しているが、万已むを得ざる場合は、決議不認可権を行使、予算案を原案執行する決意である旨、窺い得られる内容の返書が同学会に寄せられた。

まことに津中学校存廃問題は、成川知事の熱烈な尽力と、輿論の刺戟に、さすがの県会議員もその不合理に目覚め、目出度く予算成立したが、東京にあって努力した「三重同学会」の功績も忘れることはできない。

弘田正郎校長

第八代校長、金田楢太郎が、明治三十五年九月大阪の北野中学校長に転任すると、千葉県師範学校長の弘田正郎が学校長として着任した。弘田校長赴任の三十五年は所謂金田校長排斥の大騒動があり同盟休校潮々として起り、生徒の乱暴きわめてはげしく、県当局も策の施しようがなかった。

当時三重県知事は古荘嘉門で、かって熊本国権党の領袖として豪勇を揮った人物であり、美事な銀髯をしごいて、県下に号令していた。従って長年学校騒動の多い、三重県立津中学校に対し、誰か適任者を配せねばならぬと考慮していた。たまたま畏友弘田が、千葉県師範学校にて有名な学校騒動を解決した事を知り、津中学の難局に当らせることにした。「英雄は英雄を知る」と申す通り、知事の懇請に応え、「人生意気に感ず」とばかり、千葉師範必死の留任を振切り、快然天下の難校に赴いた。その弘田も銀髯の偉丈夫であった。

転任以来教員、生徒に対し、学校規則に徒らな束縛を求めず、準拠は所謂「法三章」にとどめ、生徒の将来に期待する訓育方針を採用、専心改革に当ったので、校風とみに変わり、騒動的蠢動は些かも見られなくなった。古武士の風格をもつ「国士」であり、その性格は豪放磊落、細事に拘泥せず、清濁併せ呑む度量は日ならずして騒動を終息させ、東海の名門校に飛躍する基盤を作って行った。

ここに於て校基確固となり、弘田在任十カ年の薫育が開始されるのである。まず生徒に対し、自著の「作法辞令」で作法要綱を教授する傍、日本食、西洋料理の方式を教えた。これは、将来、国際場裡に活躍する時、外国人に堂々と伍せしめる配慮からであった。

また自編の「録吟集」で、「人生五十功無きを愧づ」とか、「をのこやも空しかるべき万代にかたり継ぐべき名は立たずして」と唱って士気を鼓舞したのである。同じく自著の「修徳編」で倫理を講義「誠実は忠信、信実にして、内外表裏なきをいう、自ら欺かず、又人を欺かず、純粋、精一にして、所謂大公、至誠なるものこれなり。修得とす」と徳を説いた。

かかる方針は、外に向って学内の自治を守る態度となって現われた。明治四十三年頃、県庁から招魂社（現護国神社の前身）の草採り命じてきた際、生徒は授業以外の御要求には応じかねる。また生徒を預っているからには、父兄保護者の諒解なしには事を進める訳には参らぬ、と拒絶した。当時津中学は、津高女、久居農林、三重師範などと異なり、自校庭の除草も実施していなかった。加えて弘田が赴任前は、大騒動があった際でもあり、まだ父兄との関係をとくに考慮せねばならぬ事情もあったが、「生徒は門下ではごわせん」の名著のもと、一蹴したのである。

五　松　塾

弘田正郎校長（中央和服）は、校長官舎に生徒ばかりでなく教師も集めて、四書経の講五義をした。校長の右は堀重里、左は西城茂太郎、その左が中島鹿吉の三教師、生徒には高橋竜雄、田中治郎左衛門、井伊進一の諸氏の顔も見える。（梅林正義氏、明四四卒、所蔵）

以上のごとき不屈の信念は、県庁学務課の上位にある文部省に対しても変らなかった。たまたま文部省視学官の巡視があった際、弘田は視学官が来校しているのにまだ登校していなかった。小使を迎えに走らせると、漸く登校の弘田は「やあ御苦労、御苦労」とあたかも部下を見るごとくであった。

さて、明治時代人としての弘田の風貌を現わす逸話は、大逆事件に際しての態度である。事件の朝最上級五年生を掲示場に集合させ今朝の号外で知った大逆事件の犯人、幸徳秋水は土佐時代の学友であるが。かような者を学友から出したのは恐懼のきわみであり、若し司直の手で酷刑がなければ、彼を同情せずして面罵し、自決を促す所存である。諸君のなかに校長と行動をともにして呉れる者はないか、と涙を流して訴えた。生徒は全員賛成、校長は諸君の賛意が得られまことに有難い、これで沸え立つ心中もおさまる、とその粛然として声なき場を立ち去ったという。

当時教務には、堀重里、田中為治の良材あり、前田七之丞、西城茂太郎、駒田義三郎、宮治岩蔵、小山内孝九郎といった錚々たる教師が談論の華を咲かせ、生徒監には洋努、稲葉浩音の両雄が、全校圧する猛威（？）を振った時代であり、まことに「男は一世を推倒し、知は万古の心胸を開拓する」の概ある名校長のもと、明治の殿後を飾るに相応しい教育が、孜々として実践されたのである。

大正元年十月、弘田はかねてからの病「脳エンボリー」のため休職せざるを得ず、拮据経営十年余錚鏘無事のうちによく生徒を感化し、津中学の名声と基礎を確立幾多の功績を残して第七代、松村伝校長に継承した。

女学校開校と清水校長

第十一回通常県会は明治三十二年十一月二十五日招集、新事業として津市高等女学校を県立に移管し、県立高等女学校とする経費、六千五百二十八円が計上されたが、後年度の施設に延期すべしとして全額が削除された。

しかし、翌三十三年十一月開会の通常県会に、津市高等女学校県立移管施設費、六千五百七十七円六十六銭一厘が提案されるや、原案どおり可決、ここに多年の懸案は通過した。従来津市に開設された女学校を県立に移管するとともに、建物八棟、建坪百九十二坪を高等女学校用として譲受ける件も、予算案とともに可決され、津市の希望どおり成立した。

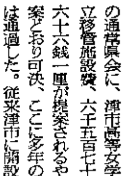
中等教育を振興させるのは政府の近代教育制度整備の方針からでもあったが、知事が古荘嘉門になるや、県下教育施設の充実が積極的に進められた。実業教育向上のため松阪工業学校を新設、農学校設置の建議にもとづき久居に農業学校を、また女子師範学校および商業学校の新設費、鳥羽商船および大湊造船徒弟学校、四日市女学校の補助金支出などと、学校施設の向上を急いだ。そのため、三十六年度歳出予算総額九十六万七千余円のうち、実に教育費は二十七万四千九百円の多額になったのである。

さて津高女は三十三年十二月、校内裏手の土手を崩し堀を埋め、長さ十一間、巾六間の教舎一棟を新築し、翌年の開校に備えた。

三十四年四月一日、学習院教授、藤井長蔵を学校長に迎えるとともに、教科課程を次のように定めた。

修業年限は四カ年とし、次に示す科目のうち、英語および手芸は随意科目とする。教科目は、修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、習字、裁縫、音楽、体操で、毎週時間数は第一、二学年がそれぞれ二十八時間、第三、四学年が三十時間と定められた。四月十九日入学選考を行い、二百四十六名中二百名の入学を許可した。かくて開校準備全く成り、四月二十五日始業式を挙行、ただちに授業を開始した。以後当日をもって創立記念日としたのである。

さて、津中学校の校史に弘田校長があるごとく、清水誠吾校長の名は、津高女の歴史に特記せねばならない。当時佐賀中学校長であった清水は、三十九年九月文部省からの命で三重県出向として着任した。ところで清水校長を赴任早々待ち受けていた問題は何であったか。



清水誠吾校長　女学校時代の後期に撮影されたものである。氏は晩年になると、すべての宗教に、それぞれの意義を認めるようになり、また、土にも水にも生命が宿るとして、物には生命があるとする信仰に傾いた。（清水きやう氏、明治45卒、所蔵）

その頃校内は教師間が二派に分裂、表面目立たぬ暗斗があった。毀誉褒貶を念頭にせず、立身出世を欲せぬ清水は、隠然たる勢力を培ってきた二教員を見事に取り押え学園内の暗雲を一掃した。

明治末年、家政を主にする実科教育が叫ばれる一方、大正デモクラシーの先駆を警戒、婦徳養成の女子教育が論ぜられる思潮を眺めて、清水は如何なる教育方針で臨んだか。

まず生徒心得として「心の掟」という日本人として必須の座右銘が作られ、朝礼にこれを唱和させた。その内容は、世間の恩を忘失させないことであり、正直律義の徳を養い、虚飾好弁を排する態度を求めるものであった。

身体の鍛錬も必然的に重んぜられ、阿漕が浦で水泳訓練を実施した。当時としては空前の出来事であるため、県下の新聞社が写真取材をしようとしたが、校長は断固撮影させなかった。毎年七月中二週間にわたる在校中の訓練は、後年関東大震災の際、隅田川に飛び込んだ東京遊学中の津高女卒業生を、溺死させなかったことで効果を現わした。

富士登山実施も全国初めての壮挙であり、県内では、津中学が経ケ峯に遠足するからには、女子も出来ぬことはないと、四十年から第四学年の遠足行程に組み入れた。

女は女らしく、男は男らしくが主義であるから、男女共学は宜しくないが、男女は同権でなければならぬ。そのため基礎的学問は男女同程度させねばならぬとして、四年卒業の上にある補習科課程の充実に専心した。

しかし清水の真骨頂を発揮したのは、巷間伝わる次の逸話である。

日露戦争、旅順閉塞隊に加わり戦死した杉野兵曹長の妻「りう」が、そのご博物館の見張人であることを耳にした校長は、国に尽した人の遺族を捨て置くことはできぬと、生徒取締の名目にて学校に勤務させる一方、学歴のない夫人に対して東京へ出向させ、東京シンガーミシン裁縫学院で教員免許を得させた。四十二年九月正式に助教諭として採用したのである。

この事が所謂「日本主義」に徹した清水の本領である。

かくて大正十三年十二月、県学務課の真意を察した清水は自ら辞表を提出、第四代校長、佐々塚二郎と交迭した。明治三十九年より十八年間の長きにわたり、淑徳の涵養と、健康なる女学生の育成に尽瘁した一師表を、ここに見ることができるのである。

付記

明治期の出来事には十五年の山本栄吉事件、二十六年の中学校紛擾事件、三十五年の金田校長排斥問題があります。三事件にも一通り資料は収集しましたが、山本事件については筆者の見解に不明確の点があり、後二者は資料整備されたと申せません。現段階ではまだ発表の時期に非ずと判断しましたので、御諒承乞う次第です。

昭和39年度同窓会々計決算報告

（S39.8.1～S40.5.31）

収入の部　¥ 1,902,607円

項目	金額	備考
繰越金	153,635	昭和38年度より
募金	535,385	
基金	160,800	
入会金	314,840	S39年度卒業生より 273,500 第1学年在校生 〃 20,670×2（4,5月分）
雑収入	737,947	名簿売上げ 627,200　広告料 80,000 銀行利子 30,747
計	1,902,607	

支出の部　¥ 610,643円

項目	金額	備考
総会費	1,220	
人件費	166,500	事務職員及びアルバイト手当
旅費	21,284	東京 2名 大阪 1名
消耗品費	150	補修ラベル（名簿用カード）
印刷費	159,450	会報、ハガキ、振替用紙、封筒
通信費	173,300	郵便切手送料 149,330　払込手数料 23,970
卒業式祝菓子	67,200	
雑費	21,539	固定資産税、慶弔費、その他
計	610,643	

収入済額　支出済額　残額（翌年度繰越）
1,902,607円 － 610,643円 ＝ 1,291,964円

昭和40年度同窓会々計予算

収入の部　¥ 2,072,764円

項目	金額	備考
繰越金	1,291,964	昭和39年度より
税金	280,800	1学年 30円×680人×10　2学年30円×680人×2 1 〃 30円×600人×2（41年度生）
入会金	370,000	3学年500円×740人
雑収入	130,000	会長寄附 120,000　銀行利子 10,000
計	2,072,764	

支出の部　¥ 780,800円

項目	金額	備考
総会費	135,000	
人件費	250,000	事務職員 15,000×16月　アルバイト 500×20人
旅費	30,000	東京2回
消耗品費	5,000	文具代　ゴム印等
印刷費	120,000	会報　封筒　その他
通信費	110,000	郵便切手　払込手数料
卒業式祝菓子	96,000	120円×800人
雑費	25,000	固定資産税　慶弔費　その他
予備費	9,800	
計	780,800	

収入　支出　残額
2,072,764円 － 780,800円 ＝ 1,291,964円

（註）残 1,291,964円については同窓会基金として積立てる方針で、予算を組みました。

お知らせ

叙勲七氏の祝賀会

昭和四十年度の生存者叙勲にはわが同窓から七氏がその栄を受けられた。牧隆泰氏Ｍ39、天野修一氏Ｍ40、松井春生氏Ｍ42、岡田完二郎氏Ｍ42、野田哲造氏Ｍ42、小笹徳蔵氏Ｍ43、池田克氏Ｍ44の七氏で、津高東京同窓会の主催による祝賀会が、二月十一日東京芝白金の迎賓館で開かれた。三重県からも学校長はじめ八氏がかけつけ総員六十名の同窓が一堂に集まって温い春明気の中にその栄誉をたたえると同に、同窓会の発展を慶祝しあった。

（学校長・市川一郎）

陳川一中会の開催

久しく開きませんでした陳川一中会を、左の通り開くことに致しました。

一、期日　四月十七日午前十一時より

一、場所　津市丸の内日本生命のホールにおいて

別項（四面）の通り当日は稲葉先生の追善供養も行われますので兼ねて多数御出席下さいますようお待ち申し上げます。なお母高の歴史を調査していられる真弓六一氏にも御出席願い、昔の一中時代を大いに語りたいと語っています何卒特ダネを御持寄り下さいませ

（前川一）

事務局より

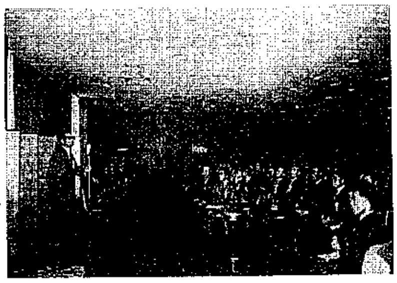
▼**昭和41年度総会は8月7日**（日）に開かれることと決りました。詳細は追って発表されますが会員諸氏は今から御予定の上、ふるって御参加下さい。▼**同窓会名簿**は今後一部二〇〇円に値下げされることとなりました。未購入の方はこの機会に是非お手許にお備え下さい。但し郵送の場合は送料として一部につき一〇〇円を申しうけます。▼**旧校友会誌会報**等お持ちの方はふるって事務局に御寄贈下さい。校史編纂の資料として利用し、又永く保存をさせて頂きたいと思います。▼会報3号にも多数の会員の方々から御寄稿を賜りましたが、紙面の都合でかなりカットさせて頂いたのもあります。紙上をかりて御礼と御わびを申し上げます。どうかこれにおこりなく「**会員の頁**」には今後もどしどし御投稿下さい。▼学校の住居表示が変りました。津市新町三丁目一ー一

第三回 東京同窓会の記

「紙は薄いが心は厚い、それを頂く年賀状」

私は正月が来て津中時代の友人から来る年賀状に目を通すとき、あの六稜の帽と白線三本の帽子にニキビ面の、中学時代のありし日の友の面影やしぐさを思い浮べ、昔を懐かしむ楽しいひとときを持つことにしております。本当に私達にとっては中学校時代の先生や友達が一番懐かしく且印象にも残っているようです。昭和二十六年上京以来数年は同窓の人達とも御無沙汰勝ちでしたが、次第に在京同級生の集いが出来、今では年に一二度は集る様になり本当によい事だと喜んでいましたが、昭和三十八年九月、一中、津中、三重桜、津高を一括した津高東京同窓会が発足し、回を重ねる事三度、第一回総会は尾崎記念館に、第二回は市町村会館に、そして昨年第三回はホテルニューオータニにと年々その発展振りは目覚しいものがあり、終戦後母校を失った感じであった私達には、正直なところ何かぴったりしないものがありましたが、それでもそれ以上に母校が出来、後輩が出来たという何かほのぼのとした嬉しさと安らぎがこみ上げて来るようです。今では立派な先輩の方々の御指導の下に着々基礎作りも進み、将来は勉学に、就職に、上京される後輩の方達の為に少しでもお役に立つ様な立派な組織にしたいものだと胸ふくらませております。どうか在京の方々は勿論、郷里の方々もこの津高東京同窓会の発展に御尽力下さいます様お願い申し上げます。最後にこの津高東京同窓会の発足については特に松本英郎氏(T8津中)岡山知一氏(S8、津中)の御両人の蔭の御尽力が絶大であった事を附記させていただきます。

(S18、北川智一、記)



10月23日、ホテル、ニューオータニにて

東京同窓会役員(任期二年)

会長 木村久米三(M・42)
副会長 平尾誠一(T・5)
〃 浅生信一(T・6)
〃 檜谷政一(S・2)
〃 宮本一郎(S・11)
〃 加藤精一(S・22)
〃 吉沢さだ(T・10)
会計監査 吉川貞雄(T・7)
〃 山田守十郎(T・13)
〃 加藤貞子(S・2)

▼東京同窓会では近く会員名簿を改定発行する事になりましたので住所変更、町名変更など御通知下さい▼東京同窓会では会の運営のため、一口千円の基金を募集しており、既に三十数万円集まりました、取敢ず目標を三百万円にしています、会員諸氏の御協力をお願いします。▼昭6会から三十四年ぶりにクラス会を開いたと御通知と名簿を送られました。東京でも会報を出したいと思いますのでクラス会の模様など御知らせ下さい。▼東京同窓会の事務所は左記の通りですが、近く加藤精一氏の御厚意により岡三証券本社に移転することになりました。

事務所 東京都港区芝片門前二ノ二〇(岡山方)
振替貯金口座東京八〇六六四番
銀行口座(当座) 百五銀行東京支店
名儀人 津高東京同窓会

故稲葉先生を想う

金丸厚三郎

稲葉先生は「鬼」のニックネームで代表されるように、生徒から嫌われた先生の代表格であったことは、万人の認めるところでありましょう。或る回の卒業生は、校門に柊を卒業記念樹として植え鬼の目を突刺そうと皮肉なことをした程でありました。根性悪るの稲葉さん、稲葉の鬼がいなかったら、さぞ学校ものんびりとなるだろうと、思った者が多かったと思います。然し生徒に最も強く影響を与えたものは先生の根性で、勝手気儘でありたい青年に、頑として立ちはだかり、憎まれようと目を突かれようと、自分を顧みることなく、信ずる道を徹底的に押し通された強さに頭が下り、今時には滅多にみつからぬ人物だと信じます。根性の不足が問題になり鬼の大松がもてはやされる昨今、鬼の稲葉も以て瞑す可しだと思います。先日の三菱信託社長甘粕二郎氏よりの悔み状にも「五十年前に陳川校庭で、先生から叱咤根性を鍛えられた日々を偲び誠に感無量です」とありました。しかし、このような性格から、生徒からもお子供さんからも好かれていなかった為か、晩年はお気の毒な境遇で、御病気になられてもお世話する人もなく、後援会が必要になった次第です。嫌われていた先生の後援会を、どんな関係があって発起するのかという方も多かったようですが、生徒であった時はともかく、今になってみると、先生の憎まれ役の尊さを認識される人が多く、見舞金は予定以上に集まり、病院にはお見舞の卒業生が引きもきらず、先生もさぞ嬉しかったことと思います。

去年の夏には、大阪の御令息の所へ行かれる筈で御宅の整理もしたのでしたが、色々の事情でそれができなくなりました。そこで役員有志相談の結果、老人ホームで気楽に暮して頂こうということになり、市や県に御願して、一身田のホームが増築になるまで一時名張のホームに入寮していただくことになりました。名張では皆さんから大変愛くしてもらわれ、喜んでいられました。津からはお見舞にも度々行けませんでしたが、名張高校の藤島先生始め名張在住の卒業生一同の御同情で、一層よい老後を送っていられました。

しかるに去年十二月八日、先生には、突発的な脳内出血の為、五時間程の煩らいで急逝されました。中学時代の恩師の内でたった一人生き長らえられました先生を、親とも思い、親身になってお世話申上げて参りました私等一同は、あまりに急なことに只呆然とするばかりでありました。

顧みますれば、亡き先生は明治三十六年三月津中に御着任になり大正十三年三月津高女に御転任、昭和八年三月御退職になるまで、三十年に余る長い年月、多数の生徒を御薫陶賜わり、多くの英才賢女を育てて頂きました。私等が今日尠く人後に接して活動し得ますことは、一重に先生の厳格なる御指導の賜と深く感謝申上げます。八十五年の長い人生で、色々御苦労もあったことでしょうが、どうか御浄土で安らかにお眠り下さいませ。御冥福を祈ります。合掌。

○稲葉先生追善供養と記念文庫

一月三十日、稲葉先生後援会発起人会を津中央公民館で開き、御見舞金残額(約五十万円)を以て左の事を行うよう決定致しました

一、追善供養を、四月十七日午前十時より正覚寺(永井病院北)において行い、永代御経をあげてもらうよう取り計うこと。

一、永久に先生を偲ぶ為に、津高に記念文庫をつくること。

(附記) 稲葉先生のお宅にありました銀杏の樹五本を学校に寄贈頂きましたので校庭に移植しました。本紙一面の校舎の写真に写っていますのがそれであります。

会員のページ

稲葉先生と菊

守(楠)敦子(S13)

稲葉先生といえばすぐに菊の花を思い出します。赤、白、黄の見事な大輪の菊を百本、いえ二百本以上もありましたかしら、きれいに二つの花壇を作って並べられた美しさ明かるさは、今でも鮮やかに私の脳裡に写されて消えることはございません。その花壇のすぐそばの南東に面した一番いいお部屋において頂いて、私は昭和十三年卒業までここで勉強させて頂いたのです。でもあのような立派な花を咲かせられるには、木枯らし吹く寒い冬のうちから土の準備やら芽の保護やら、雨につけ風につけ並大抵の御苦心ではありませんでした。秋になると花にひかれて見に来られるお客様も多うございましたが、一年中の先生の御苦心のわかる方は少なかったのではないかと存じます。

陶淵明の詩の一節

「菊ヲ採ル　東籬ノ下
悠然トシテ南山ヲ見ル」

先生のお人柄はこの詩のような感じでした。もともと先生は教員生活をやめられてから健康の為に始められた菊作りだそうですが、やはり花がお好きでいられたのです。日曜など机に向かっている私に『敦子さん又お菊さんに逢いに行って来るワ』等と冗談をいって、例の鳥打帽をかぶり腰に手拭いを下げて裏の畑の方へ行かれたものでした。花を愛する人に悪人はないと申しますが、先生も又花を愛するやさしいお気持のお方なのに、教員時代には『鬼』というあだ名をつけられていられた由、など聞いておりますが、私がお世話になって起居を共にさせて頂いた頃は、丁度学校をやめられたばかりの時で、お年のせいもありますのか、そんなきびしい感じは受けませんでした。

でも先生のガッシリした大きな体格と色の黒い顔、高い頬骨の為に奥の方に光る眼等、老いたりとはいえ精悍そのもの 九州男子の面目躍如たる風貌でした。この先生が若かりし頃きびしい教育をなさったら、或はそのあだ名もふさわしいものであったかもしれません。「鬼」のあだ名がついてから稲葉家では節分の豆まきに『鬼は外』がいえなくなったのよと、奥様が笑って話して下さいましたが、稲葉先生を思う時私はこの奥様を切離しては考えられません。奥様は先生に対してはかげの形にそう如く実に貞淑なお方でした。先生も又小柄で少しお弱い奥様をとてもいたわっていられたのを覚えております。朝、奥様がお台所をなさるうちに、先生が座敷のお掃除から雑巾がけまで全部おやりになりました。夜には先生がよく奥様の肩を揉んだりしていられました。

十年程前でしたか、はじめて津に参り、先生をお訪ねしました時はまだまだお元気で『百才まで生きるつもりだが生きられるかどうかあんたの旦那さんに精密検診をしてもらいたいものだ』等と笑っておられました。そのお望みを果して上げられなかったお互いの住いの距たりを残念に思っております。

この十二月七日(この日が先生ご逝去の前日であったこともつゆ知らず)はからずも長瀬先生から『先生御夫妻が名張の養老院に入っていられるらしい』とのお噂を伺い、まさかと思いつゝ養老院へ問い合わせの手紙を出しているうちに、長瀬先生から追いかけて『先生ご他界』とのお知らせを頂き夢かとばかり仰天してしまいました。養老院においでのことが確かなら、お正月に家業休診日の続きますうちに、是非ともお見舞かたがたお訪ねしようと思っていました矢先き、生きて再びお目にかかれなくなりましたとは誠に断腸の思いでございます。

十二月二十六日の告別式には三十年前の先生のご恩に対するせめてもの感謝の気持を、先生の愛された菊の花に託してご霊前に捧げさせて頂きましたものの、先生のご境遇も知らずにいた怠慢への悔恨と自責の念にかられ、後ろ髪を引かれる思いでお別れ致しました。仏教のいうあの世というものがあるのなら、必ずおそばに参ってご恩返しさせて頂きましょう。

今はただ先生の安らかな御冥福をお祈りするばかりでございます

母国に帰って

在米客員　大前とみ

私は昨年四月、三十五年ぶりに帰国しましたが、その折の感想を何か一つでも、と竹鳥先生から申しこされましたので素直にペンをとることに致しました。

満六年近くも親しんだ津高女は実に忘れようとして忘れえぬ私の心の故郷です。大阪で結婚しまして主人と共に渡米、その後三児を連れて十一年ぶりに祖国の土をふんだ時に、清水誠吾校長も、同僚先生方も御健在で、歓迎会の、記念撮影のと大変お世話になりました。あれから三十五年、数々の思い出の中でも一番衝撃をうけたのは太平洋戦争でした。終戦後荒廃した祖国の姿を、各種の報道機関を通じ目に耳にする毎に、胸の痛みを感じたものでした。

今回三十五年ぶりに接した日本の姿は、よくここまで復興躍進したものだという印象と、筆舌につくせない喜びとを覚えました。

また訪日中五月十八日、新緑に輝く東宮御所に伺候、両殿下に拝謁、特に美智子妃殿下から次々と御下問があり、予定時間の二十分をすぎるまでお話申し上げる光栄に浴したことは大きな感激でした。

津では教え子の方々が竹鳥先生とご一緒に旅館平次にお訪ね下され、五十年ぶりに感激の対面「あなたはどなたでしたかね」と旧姓をお聞きしなければ思い出せない位それもその筈、私自身が誰かに紹介して頂かなかったらお判りいただけなかったようでしたから。

東京では三重桜支部の方々が迎賓館で歓迎会や同窓会を開いて下され、思いがけぬ楽しい時間を与えられて嬉しかった上、久しぶりに歌った「三重の桜の色もよく」の校歌には熱いものが頬を伝うのを覚えました。帰米の朝は飛行機がとぶかしらとあやぶまれる程の風雨でしたが、吉沢さださんが代表で羽田までお見送り下さいました。その誠意は津高女の根深く植えつけられた尊い教育精神、何物にも替え難い崇高偉大な美徳と、心から敬意を表した次第です。

NHKの「私の秘密」出演は全く突然のことで、皆さんにお報せするタイムのなかったことをお詫び致しますと共に、私も老いた顔を見て頂けなかったことを残念に思っています。現在、私はサンフランシスコで金門学園という日本語学校の園長をしていますが、二世、三世に正しい日本語をわからせ、子々孫々日米両国のかけ橋となる役目をしてもらいたいと念願して、ただ今の仕事に対し、昨日をふり返り、明日に希望をもち元気を出してやっている訳なのです

では三重桜の皆様のご多幸をお祈りしています。ご機嫌よう。

(附記)

大前先生は旧姓松浦、大正三年四月から同八年十一月まで県立高女に御在職、裁縫、手芸を受け持たれていました。

五一会総会

一月十六日津市三番町魚宗別館で開催、後藤義之進先生を囲んで四十余名が懐旧談に花を咲かせた。昨年は卒業三十周年に当り、物故者追悼法要を営み盛会だったが、今年も前回を超える参加があり、会の結束は益々強化された。なお新幹事に内山三郎(津)藤森親良(安芸)武部晃吉(一志)の三君を選出した。

(辻 嘉一記)

陳川十七年会

こゝ数年来、毎年開催してきました陳川十七年会は、四十年度を迎え同窓の消息も二、三の者を除き全員判明し、東京・大阪支部の会合も回を重ねるに至ったのを機会に、津中時代のクラス担任であられた恩師を全員御招待して開くことになりました。

昨秋十月二十四日津市内料亭に、遠く長野県駒ケ根市から竹村利夫(国語)布施市より山田清一(英語)浜松市の鈴木留吉(英語)の諸先生方を迎え、地元では一見藤太郎(教練)小野寺熙太郎(体育)高藤浄進(英語)の先生方と、六名の恩師の御出席を得て、同窓諸兄の参会者二十八名を数え、卒業以後二十数年ぶりの懐旧談に花が咲き、楽しく心に残る同窓会でした。

写真、前列左より竹村、小野寺、山田、鈴木、一見、高藤の先生方で、皆大変御壮健で意気盛んなお姿に一同感服し教えられるところ多々ありました。経ケ峰に日が傾く頃、恩師諸先生の御健康と陳川十七年会の発展を祈り、万才三唱で散会しました。

(幹事　小林記)

6先生を囲んで17年会

三重桜会報告

昨年春「柳山の校舎がとりこわされる」という話を聞いてから、急に古い先生方とご一緒に名残を惜しみたいと考え、長瀬先生などにご相談して百十三人の先生方にお誘いの手紙を出しました。所が続々と出欠有無のお返事を頂いてとてもおなつかしく拝見しましたが、当日(五月廿九日)会場の東洋軒へは高畑先生が東京からのお帰りをお立寄下され、また田中(伊藤)キヨシ先生が高崎からかけつけて下さいました。六十年に亘る各時代にお勤め頂いた先生方でしたけれど、高畑、杉野両校長を中心に、知るも知らぬも知りおうて、亡くなられた方を偲び、卒業生のあの人、この人の噂をし誠に和気にみちた楽しい一日でした。午後柳山へ行き、長い年月の風雪に老い朽ちた校舎を眺め、椅の木の下を歩き、階段の手すりをなでて各々勤務当時の思い出にふけった事でした。折柄作法室でクラス会をやってられた昭一八卒業の方に思いがけぬ対面両方が大喜びをしました。名残はつきませんでしたがまたの会合を約して三時頃お別れしました。お集り頂いた先生は次の方々ですが皆とてもお元気でした。(敬称略)

高畑浅次郎、杉野芳郎、大西幸植村たか、岩瀬久代、山辺政一、田中キヨシ、辻村謙三、井川とよ森竜日出、長瀬ふさよ、山田重次郎、岩永武、今村房、小川三津、久世きん、伊達淑子、北原タキ、新羅定勝、井上たみ、大石あや、笹井久子、末崎武生、小尾寿恵、中島彰子、宇仁田篤、梶原禮子、倉田包、竹島とよ(**竹島とよ記**)